

令和 元年 6 月 18 日現在

機関番号：32678

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13270

研究課題名(和文) 留学環境における語用論的発達過程と、日本人英語学習者プロフィールの相関

研究課題名(英文) Correlations between pragmatic competence and the learner profiles of Japanese students of English in a study-abroad context

研究代表者

稲垣 亜希子 (Inagaki, Akiko)

東京都市大学・共通教育部・講師

研究者番号：50770757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：学習者の個人差要因の中で特に動機づけの側面に着目し、第二言語習得の動機づけと、留学環境下の英語学習者の語用論的能力の発達(会話の含意の理解)との関係を探った。日本人留学生の動機づけについては6つの因子：「自己決定」「自信」「L2理想自己」「L2義務自己」「関係性」「L2コミュニケーションへの積極性」(L2WTC)が認められ、会話の含意の理解力が留学前後とも高いタイプの学習者にはこのうち「自信」の動機づけ因子のみが有意に強く働いていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外留学プログラムを有する大学が増加しつつある昨今、異文化間におけるコミュニケーション能力に関わる語用論的能力を効果的に発達させていく方法を探ることは急務であり、かつ重要な課題である。本研究では学習者の個人差要因の中でも動機づけに着目し、留学前からの英語に対する「自信」の動機づけ因子が強い学習者の語用論的能力が留学前後共に高いことが示された。今後さらなる個人差要因を明らかにし、研究を進めていくことで、語用論的能力の発達に有効な留学プログラム構築への貢献が期待される。

研究成果の概要(英文)：The present study focused on motivation among several individual differences in Japanese learners of English, and investigated the following two research questions: (1) whether the pragmatic competence of Japanese learners of English improves when they are studying abroad; and (2) the relationship between the learners' pragmatic development and their motivational factors. The results indicated that the participants developed a comprehension of conventional implicature, while improvement was absent in non-conventional implicature. The highest scoring group, divided through a cluster analysis, showed a statistically significant result on only one factor: "confidence."

研究分野：中間言語語用論

キーワード：中間言語語用論 動機づけ 留学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二言語習得 (SLA) の分野において、学習者の個人差 (Individual Differences) は中心的関心事の一つであり、1990 年代初頭からその研究が急激に増加した一方で、SLA の一つの分野である中間言語語用論の研究領域においては、1990 年代半ばになるまでその重要性が認識されることはなかった。この分野では、Kasper と Schmidt による語用論的能力への個人差要因 (特に動機づけ) の影響を調査した研究 (1996) が最初と言われ、それ以降徐々に研究が増えるに至ったことが知られている (Takahashi 2019)。

その後のこの領域での個人差要因の研究 (言語適正、動機づけ、性格、ジェンダー、L2 習熟度等) の積み重ねの結果、語用論的能力の発達は、学習者個人の様々な要因が複雑に作用して起こるのではないかというのが、中間言語語用論研究者の共通の見解となった。

(2) 中間言語語用論研究者の関心事は、「教室環境」だけでなく、暗示的インプットが大量に起こる「留学環境」にも向けられた。留学期間と依頼表現の語用論的な発達の関連を調査した Alcón-Soler は、その研究 (2015) の中で、留学中の学習者個々の感情や知覚がどのように語用論的能力の獲得に影響するかが今後の研究課題の一つであると述べている。教室環境でのインプットの種類と語用論的気づき、そして動機づけとの関係を一連の研究で調査した Takahashi も、留学環境下で同様な結果が再現されるかどうかの調査の必要性を唱えた (Takahashi 2015)。このように、留学環境における学習者個人の辿った詳細な道筋や個人差要因と、語用論的発達の関連の解明が求められていた。

(3) そこで本研究代表者は、留学環境における、動機づけと語用論的能力の発達の関係に着目した。SLA 分野では自己決定理論に代表される社会心理学に基づく第二言語習得の枠組みでの動機づけ研究が台頭する中、中間言語語用論の分野においてはこの枠組みでの研究が非常に少なかった。そこでまずはこの枠組みでの動機づけとの関連を見る必要性を感じ、研究を組み立てることとした。

2. 研究の目的

留学環境下での語用論的能力の発達の多様性が起こる理由を探るため、学習者の個人差要因の一つとして動機づけに着目し、以下の2点の目的で調査を行った。

- (1) 日本人英語学習者の語用論的能力は留学環境下で発達するか
- (2) 学習者の留学環境下での語用論的発達と動機づけには相関があるか

3. 研究の方法

研究期間の3年間に行った研究活動とその方法を年度ごとにまとめると以下のようになる。

(1) 2016 年度

テスト及び質問紙の作成

会話の含意の理解 (「断り」について) を測る語用論的能力診断テスト、及び学習者の個人差を探る質問紙を完成させるため、予備調査を行う計画を立てた。国内の大学生及び、本研究の調査対象となる学生と同じ留学プログラムより本年度に帰国した大学生に対して予備調査を実施した。

本調査 (データ収集) の開始 (第1グループ対象)

本調査を開始するための準備段階として、予備調査結果の分析および検討を加えた後、テスト (語用論的能力診断テスト) と質問紙 (動機づけ質問紙及び対象言語接触量質問紙) を完成させた。その後本調査として、オーストラリア留学に出発する大学生 (第1グループ) に対する事前テストを実施した。併せて調査結果の分析・解釈を正確に進めるために必要な現地調査を行った。現地では、調査対象大学生グループの参加している留学プログラムにおいて、学生の状況を詳細に調査すると同時に、関係機関・関係者への聞き取り調査を行った。

(2) 2017 年度

本調査の継続 (第2グループ対象)

前年度にオーストラリアへ出発した第1グループの帰国時に、語用論的能力診断テストの事後テストを実施した。また、次に出発する第2グループに対して事前テストを実施した。

分析の開始

帰国した第1グループのデータ整理を行うのと同時に、帰国した第2グループの事後テストを実施した。2つのグループ全ての量的データが揃い、量的な分析に着手した。両グループの事後インタビュー調査も並行して行った。質問紙項目別に集計し、動機づけの因子分析を行い、因子を特定した。

(3) 2018 年度

分析結果をまとめて発表する期間と位置づけ、学会での発表および論文執筆・投稿に従事した。

4. 研究成果

語用論的能力診断テスト（事前・事後）と質問紙調査の全てに参加した 152 名のデータを抽出し、分析を行った。

(1) 調査対象者

都内大学 2 年生 152 名（男性 98 名、女性 54 名）、平均年齢は 19.4 歳であった。留学前の TOEIC の平均スコアは 466.82 点（スコアの幅は 210 点から 845 点）である。

(2) 留学プログラム

本研究の調査対象者となった全ての学生は、1 年に及ぶ事前英語指導の後、2 年次前半と後半に分かれて 16 週間のオーストラリアの大学への留学プログラムに参加した。その留学プログラムの前半は現地大学に併設の ESL の授業を受講し、後半は大学で特別に用意された教養科目（国際関係学など）を受講した。日本人学生はキャンパス内の学生寮に滞在し、ルームメイトは可能な限りオーストラリア人や他の国からの留学生（インド、中国など）となるよう組まれていたが、日本人のみの場合もあった。この留学プログラムにおいては、パディ・システムと呼ばれる、現地学部生及び大学院生とグループを組んでの課外活動が必須であることと、言語交換プログラム（Language Exchange Program）に参加して日本語専攻との学生とペアを組み、週 1 回ほどのペースで日本語と英語を交えたセッションを 1 時間程度行うことが特徴的であった。

(3) テストおよび質問紙

語用論的能力診断テスト

Taguchi (2012) が開発した、会話の含意の理解を測るリスニングテストを基に、変更を加えて作成した記述式（選択式）問題（実施上の制約と学生の英語習熟度レベルの観点から、リスニングではなく記述式に変更して使用することとした）全 40 問の内 16 問は慣習的含意の理解を測る問題（内 8 問が「間接的断り」、8 問が決まり文句）、16 問は非慣習的含意を測る問題、8 問はダミー問題（分析対象外）で構成されていた。これを留学プログラム前後に実施した。

動機づけ質問紙

14 の動機づけに関わる要因（L2 理想自己・L2 義務自己、内的動機づけ、調整的動機づけ、無動機、Can-Do、Willingness to Communicate、国際志向性）を調査するために Nishida (2013) により開発され、一定の実績と評価を得ている質問紙を基にしたアンケートを使用した。6 ポイントの Likert Scale で、62 問から構成されている。留学前後に実施したが、本研究では留学前の結果を使用した。

補足資料として、対象言語接触量を測る質問紙（Freed et al. 2004）を日本語訳し修正を加え、さらに自由記述式設問を加えたものを留学後に行い、また、留学プログラム前後に参加者が受験必須とされている TOEIC のスコアを、補足分析用として使用した。

(4) 結果

語用論的能力診断テスト結果

留学前後のテストスコアについて、対応のある t 検定を実施した結果、全体のスコアについて有意差が見られた。また項目別では、慣習的含意全体には有意差が見られ、非慣習的含意には有意差が認められなかった。また慣習的含意のうち間接的断りには有意な差が見られず、決まり文句の事前事後スコアには有意差が見られた。

クラスター分け

調査対象者を、その語用論的発達の特徴に基づきグループ分けするため、語用論的能力診断テストの事前事後スコアの両方によりクラスター分析を行った結果、3 つのクラスターに分けられた。第 1 クラスターは 49 名で、事前も事後も比較的高いスコアを維持しているタイプ、第 2 クラスターは 71 名で、事前から事後に飛躍的な発達を見せたタイプ、第 3 クラスターは 32 名で、事前も事後も低いままのタイプであった。これらのクラスターの特徴をさらに詳しく明らかにするため、補足データを加えて分析したところ、対象言語接触量にはクラスター間でほぼ違いが見られず、TOEIC スコアについては、クラスター 2 と 3 は事前事後のスコアに関して対応のある t 検定を実施した結果、有意差が見られスコアが上昇していたが、クラスター 1 については事前事後で有意差が認められなかった。

動機づけ因子分析

動機づけ質問紙の結果について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を実施したところ、スクリープロットから 6 因子解構造と判断し、採用した（6 因子、51 項目で全分散の 58.5% を説明）。

第1因子：自己決定 ($r = .92$)

英語学習に関して自己決定的であり、責任感を持っている

第2因子：自信 ($r = .92$)

自らの自覚する英語習熟度に自信を持ち、授業内でも良い結果を出せると感じている傾向を示す

第3因子：L2理想自己 ($r = .87$)

こうありたいという理想の自己との差を埋めたいと考える傾向が強いことを示す

第4因子：L2義務自己 ($r = .82$)

英語学習者としてこうあるべきという義務的な傾向が強いことを示す

第5因子：関係性 ($r = .83$)

仲間や教師と協力したり関係を積極的に持ったりする中で英語学習をすることを好む傾向を示す

第6因子：L2WTC ($r = .81$)

英語でコミュニケーションをしようという意思が強い傾向があることを示す

それぞれの因子の動機づけ下位尺度の得点の平均値を算出し、分散分析により で述べた3つのクラスターに違いがあるかを検証したところ、第1クラスターの第2因子「自信」のみに有意な違いが見られた。

全体傾向を見るため、調査対象者 (152名) 全員の語用論的能力診断テストの事前から事後への伸び (gain score) と、6つの動機づけ因子の相関分析を行ったところ、第4因子「L2義務自己」とのみ弱い相関が見られた。

(5) 考察

まず2.-(1)「日本人英語学習者の語用論的能力は留学環境下で発達するか」については、全体的には会話の含意の理解は発達したと言えるが、項目別にみると非慣習的含意の理解は発達せず、また、慣習的含意の中でも間接的断りについての含意の理解は発達しなかったことがわかった。つまり、会話の含意の種類によってその理解能力の発達に違いがあるということが言える。また2.-(2)「学習者の留学環境下での語用論的発達と動機づけには相関があるか」については、6つの動機づけ因子のうち「自信」のみが第1クラスター (事前事後ともに高い語用論的能力を持っているグループ) を他のクラスターと分ける重要な要素であることがわかった。つまり留学前にすでに自覚的に英語習熟度に自信を持っていることが、語用論的能力の高さに何らかの関連を持つということである。しかしながら、留学中に語用論的能力を非常に伸ばした第2クラスターについては、この動機づけの枠組みではほぼ特徴が見られず、何が留学中の発達を促したのかを特定するに至らなかった。第3クラスターについても、補足データ分析にてTOEICスコアに関しては留学期間中、有意に発達したにもかかわらず、語用論的能力に関する発達は見られなかった。そしてその理由も特定することはできなかった。以上のことから、今後は、本研究で使用した動機づけの枠組みからもう一步踏み込んだ、語用論的に特化した動機づけの質問項目等を探り入れることも考えられる。または動機づけ以外の別の個人差要因の影響を調査の対象とすることも検討する余地があろう。

(6) 国内外における位置づけとインパクトおよび今後の展望

国内外における位置づけとインパクト

個人差の中でも特に動機づけと語用論的発達の関連についての研究は、1.-(3)で述べたとおり、SLA分野でなされているほどの数は存在しない。しかもその代表的なものは教室環境下、または英語を使用する日本国内の大学の学習者を対象として行われており、純粋な留学環境下での語用論的発達と動機づけとの関連を調査したものは非常に少ない。その意味で、本研究は国内外の中間語用論研究の分野に対して一つの貢献ができたと言えるのではないだろうか。

今後の展望

本研究では、質的なデータ収集 (事後インタビュー等) を行ったものの、その分析と併せた研究結果を出すことができず、学習者の複雑な思考過程の解明にまでは至らなかった。現在、国内外の中間言語語用論研究者の間では、量的な分析データを補完する質的なデータと統合した、混合研究法の重要性が叫ばれている。今後はその研究法も視野に入れ、研究デザインをしていく必要があると思われる。

<引用文献>

Aleón-Soler, E. (2015). Pragmatic learning and study abroad: Effects of instruction and length of stay. *System*, 48, 62-74.

Freed, B., Dewey, D., Segalowitz, N., & Halter, R. (2004). The language contact profile. *Studies in Second Language Acquisition*, 26(2), 349-356.

Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Development issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, 18(2), 149-169.

Taguchi, N. (2012). Context, individual differences and pragmatic competence. Bristol: Multilingual Matters.

Takahashi, S. (2015). The effects of learner profiles on pragmalinguistic awareness and learning. *System*, 48, 48-61.

Takahashi, S. (2019). Individual learner considerations in SLA and L2 pragmatics. In N. Taguchi (Ed.), *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Pragmatics*. New York: Routledge.

Nishida, R. (2013). The L2 self, motivation, international posture, willingness to communicate and can-do among Japanese university learners of English. *Language Education & Technology*, 50, 43-67.

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

Inagaki, Akiko. 2019. Pragmatic development, the L2 motivational self-system, and other affective factors in a study-abroad context: The case of Japanese learners of English. *East Asian Pragmatics*, 4(1), 145-168. <https://doi.org/10.1558/eap.38218> [査読あり]

Inagaki, Akiko. 2019. Pragmatic development and grammar in a study abroad context: The case of Japanese learners of English. *PanSIG Journal 2018*, 105-114. <http://pansig.org/pansig-publications> [査読あり]

[学会発表](計2件)

Inagaki, Akiko. Pragmatic development, the L2 self-motivational self-system, and other affective factors in a study-abroad context: The case of Japanese learners of English, Teaching and Learning L2 Pragmatics Conference, 2018.

Inagaki, Akiko. Pragmatic development and grammar in a study abroad context: The case of Japanese learners of English, JALT PanSIG Conference 2018, 2018.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。